

# 中国語を母語とする日本語学習者の外来語習得に関する研究 —M-GTAを用いた質的検討—

耿 耀 耀\*

## 1. はじめに

情報化・グローバル化が進む中、日本人の生活に用いられる新しい外来語が急増している。国立国語研究所（2005）によると、雑誌の使用語彙の語種別比較では、1956～1994年の約40年の間に外来語は3.5倍に増加していることが分かる。

しかし、日本語学習者（特に中国語を母語とする学習者）にとって、外来語の習得は容易ではないこともわかってきた（陣内、2008；原田ほか、2019；望月、2012）。つまり、学習者が日本語の文章を読む際に外来語に触れる機会は多く、数多くの外来語に直面することは今や避けて通れないものになっているにも関わらず、学習者にとって外来語の習得は困難さを感じやすいのが現状である。この面から考えれば、外来語は日本語学習者にとって非常に重要な一環となっていることがわかる。

従い、中国語母語話者の外来語の習得に影響を与える要因には一体何があるのだろうか。また、より効率的に外来語を習得するためにどのような工夫をすべきであろうか。本研究は、この問題を検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 外来語習得の困難さ

中国語母語話者の外来語に対する態度や認識に

ついて考察した研究がある（望月、2012；陣内、2008）。陣内（2008）はカタカナ語を学習する際に感じる困難点を探るために日本で全国的規模のアンケート調査を実施した。結果、カタカナ語の習得に困難を感じるのは学習者の母語によって大いに異なるが、中国語を母語とする学習者が最も困難を感じる事が分かった。一方、望月（2012）の調査結果も陣内（2008）と同様、中国語話者がカタカナ文字や外来語の学習や運用に困難を感じていること、そして大学生生活に外来語の学習は必要不可欠であるという意識をもっていることなどが確認できた。さらに、望月（2012）は、外国人学習者が外来語を学習する際に困難を感じる原因を以下のように九個挙げている。「発音のズレ」、「表記の揺れ」、「意味のズレ」、「和製英語」、「縮約語と短縮語」、「混種語」、「動詞化とナ形容詞化」、「非外来語のカタカナ表記」、「漢語、和語と外来語の類語」である。

### 2.2 中国語母語話者の外来語使用回避傾向

鄧（2018）は「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」を用い、中国語母語話者の外来語使用特性検討した。結果、中国人学習者は日本語の習熟度の上昇によって外来語の使用が必ずしも増加するのではなく、変化しないか、むしろ減少することが見られた。

羅（2010）では、LARP at SCU による3名の被験者が大学四年間において書いた33回の作文を分析サンプルとし、初、中、後期三つの段階に分けてカタカナ語彙の使用特徴を検討した。結果、

\*北京外国語大学・院生

カタカナ語彙数は漢語や和語よりも少なく使われ、上級日本語学習者であってもカタカナ語の苦手意識が強いと結論づけた。更に、学習者が中後期に至って教科書以外の媒介を通してカタカナ語彙を身につけることが多いと指摘している。

上述の研究結果を見ると、この原因として、中国語母語話者は全体として外来語使用を回避し、真に自信のあるものしか使用しようとしないう傾向があることがわかった。

## 2.3 認知心理学アプローチを用いた研究

### 2.3.1 英語知識

中国語を母語とする学習者は、中国語と日本語の言語知識のほかに、中学校から学んだ英語の知識をも持っている。言語学習者が一種の言語を勉強する場合、母語やすでに学習したことのある言語の影響を受ける可能性がある (Conez, 2001)。こういった日本語（における外来語）に接触する前にすでに身につけた英語の言語知識が、あとに触れる外来語の処理に与える影響を探求する研究には、大和・玉岡 (2013) がある。研究者は中国語母語話者のL2である英語からL3である日本語のカタカナ外来語の理解およびテキスト内の外来語への理解の因果関係を実験的手法を通じて検討した。結果、L2である英語語彙力が効率的にL3である日本語の外来語の語彙処理に影響を与えていることがわかった。また、同研究で、日本語の語彙力が高い学習者は外来語の自動化が進んでおりそれが外来語を多く含むテキストの読み速度に影響を及ぼすことも実証された。

### 2.3.2 文脈効果

文脈効果とは、コンテキストの有無が単語の弁別に影響を及ぼすことである。外来語の語彙処理を文脈と結び付けて検討した研究は管見の限り、ジャほか (2018) だけである。ジャほか (2018) は中国人学習者が日本語文における未知語に遭遇する際、未知語（漢字語彙と外来語語彙）の表記

形態と文の制約性とその意味推測に影響するかどうかを検討した。結果、中国人学習者がカタカナ表記の未知語に遭遇した時、漢字の処理と違って、日本語の形態表象から日本語の音韻表象を経由して意味へとアクセスしなければならないため、ターゲット単語が無意味語であるという認識が遅くなり、意味推測に時間がかかり漢字表記よりも反応時間が長くなると指摘している。

## 2.4 教科書提示による影響

しょう燕 (2016) は『日語教材語料庫』に収録された四種の大学日本語教材を中国の『高等院校日語專業基礎段階教学大綱』と比較した結果、大綱に占める外来語の割合は実際日本語に占める割合の半分に過ぎない上、使用頻度の高い一部の外来語語彙が教材に乗せていないことが明らかになった。これはある程度、学習者が外来語を学び覚えることに支障をきたすと考えられる。

他に、学習者が使う教科書が日本人実際に使う外来語頻度を反映していないと、大和・玉岡 (2013) は指摘している。

## 3. 問題点、目的と研究方法

先行研究を通して、以下の問題点が見えてきた。中国人学習者の外来語学習に焦点を当てた研究がまだ少ない上、中国語を母語とする日本語学習者に限定された場合どのような困難点が見られるのか、中国人学習者の習得にとってより影響が強いのはどれなのかについて、なお検討する余地がある、ということである。

外来語を習得するには、様々な困難点を克服する必要があることは上記の先行研究から見ればわかる。従い、中国人学習者はどのように外来語を勉強し身につけ、また習得上のような特徴が見られるのか、どのように中国人学習者の外来語習得をより効率的にアップさせるのか。本研究の目的は、中国人上級日本語学習者を対象に、L2と

しての外来語習得に関わる影響要因を体系的に探ることにある。

研究方法に関しては、中国人上級日本語学習者に半構造化インタビューを行い、学習者が考える外来語学習の実況を解明する。また、そこから得たデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用い分析し、外来語習得に関わる影響要因およびそのプロセスを解明する。

## 4. 質的データの分析

### 4.1 半構造化インタビュー

習得過程における特徴は段階によって変化すると考えられる。すでに初級と中級段階を超え、上級に至るまでの学習経験の振り返りができる上級学習者にスポットを当てることにした。そこで、8人の上級日本語学習者に、平均50分程度の半構造化インタビューを実施した。協力者の日本語平

均学習年数と平均日本滞在歴はそれぞれ4.9年と6.5月であり、調査参加時は既に日本語能力試験N1を取得していた。さらに、中には3人が同じ師範大学に属しており、残りの5人はそれぞれ理工科大学、農業大学、外国語大学、海洋大学となっている。

### 4.2 M-GTAを用いた分析結果

以上の手続きを踏まえて、8人の協力者へのインタビューの録音をすべて文字化し、34865字の中国語の文字データが得られた。その後、概念生成の作業に取り組んだ。

7人目のデータから新しい概念が出てこなくなり、それで理論的飽和に達していると判断した。その結果、39の概念、21のサブカテゴリー、5つのカテゴリーがあぶり出された。最後に生成されたカテゴリーの関係を検討し、L2習得の実情に基づいて、結果の図解を作成した。

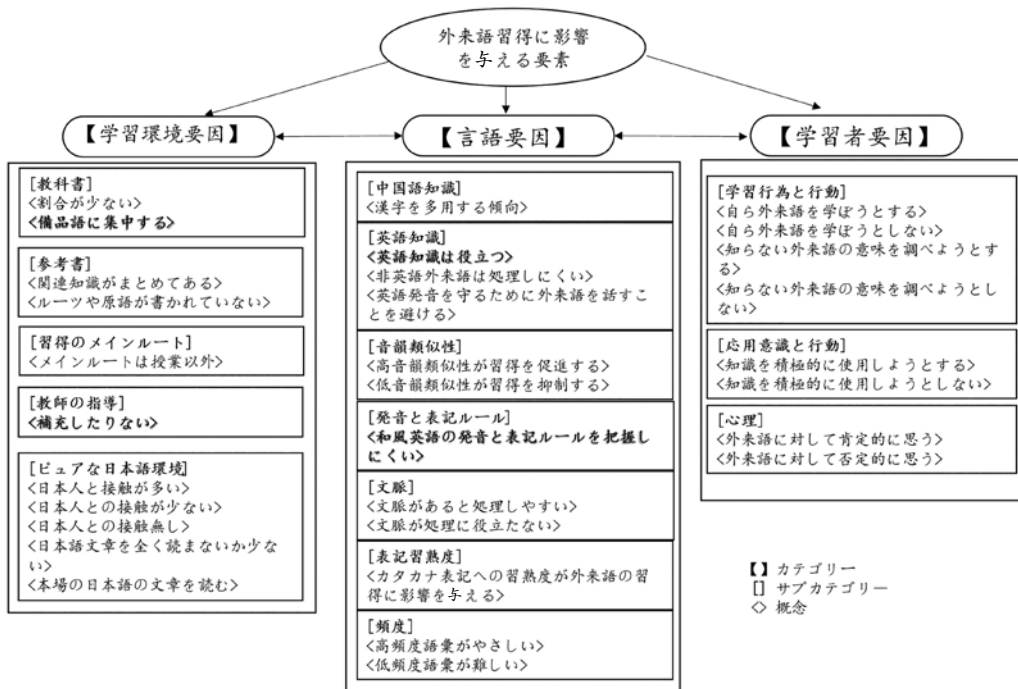


図1 外來語習得に影響を与える要因およびプロセス

### 4.3 考察

【課題①】の目的は中国人上級日本語学習者の外来語の習得に影響を及ぼす要因、およびそれらの関連性の究明にある。半構造化インタビューを通して得た質的データを、M-GTAで分析した結果、いくつかの概念と定義があぶり出され、外来語の習得に関わる影響要因も少しずつ明らかになってきた。今節では、前節で分析された内容について図1に基づいて考察する。

以下の説明では、図1で示されている〈概念〉、[サブカテゴリー]、【カテゴリー】の内容は、それぞれ〈〉、[]、【】によって区別する。インタビューで協力者の語りを“”で示す。結果、外来語の習得には【習得の意義】が多くありながら【習得上の難しさ】が存在することがわかった。外来語習得に関わる要因が多く、概ねに言えば【学習環境要因】、【言語要因】と【学習者要因】の三つがある。以下で節を分けて説明する。

#### 4.3.1 【習得の意義】

半構造化インタビューを通して、学習者が外来語習得の意義についても認識していることがわかった。中には、[インプットとアウトプットの際に上手くいく]というのがあり、例えば、“今の日本人は外来語をよく使うから、聞き取れなかったら困る。もし上手く聞き取れると困らずに済む”（協力者1；2；3；4；6）、“漢字語彙ばかり使うのではなく、必要な場合適切に外来語を使い換えることで、日本語らしい日本語を産出できる”（協力者2；3；4；6）、“会話にたくさん外来語を使ったら、おしゃれになった気がする”（協力者3；4；6；8）などの具体例が挙げられる。これらの意義はまた、結果的に学習者の外国語学習の自信とつながるであろう。

#### 4.3.2 【習得上の難しさ】

【習得上の難しさ】に関しては、先行研究で述べたもの以外、いくつかの新しい概念が導き出さ

れた。例えば、[漢字との比較]では、協力者から“カタカナ語は意味を当てにくくて難しい”（協力者1；3；7）という意見が寄せられてきた。しかし、訳をさらに聞くと、カタカナ語を難しく思うのは、それ自体が難しいのではなく、中国人学習者にとってカタカナ語彙より漢字語彙が親しみのある表記形式であるため、外来語を難しく思う傾向があるからであることがわかった。また、[表記規則が捉えにくい]は、先行研究で述べた「表記のゆれ」とは違い、“外国語から外来語となった時原語の発音と違いが生じるため、どこに長音があるか、どこに促音があるかなど、そのカタカナ表記の規則が捉えにくい”（協力者1；2；3；4；6；7）という意味を指す。従い、外来語の表記規則を指導者が学習者とともに発見し、まとめる必要があるだろうと推論できる。さらに、[専門化]は、外来語語彙はある特定の領域に集中するケースが見られることを意味する。例えば、“私の研究分野は経済学なので、いつも見たことのない新しい外来語が出てくるわ”（協力者3）という回答があった。

#### 4.3.3 【学習環境要因】

大学生の学習方法は孤立な個人的特質ではなく、周りの環境からの影響を受けやすく、学習者自身の考えと、動機づけ、クラス全体の雰囲気などの要素からも影響されやすいという（Biggs J, 2001）。そこで【学習環境要因】では、5つのサブカテゴリーが導き出されたが、まず注目したいのは、[教科書]、[参考書]と[教師の指導]といった授業関係の方面である。この三つから見れば、授業で外来語の学習への支援が明らかに不足していることがわかった。例えば、日本語の教科書に収録される外来語語彙は備品語に集中しており、消耗品的な語彙は少ないか、全くないことがわかった。“備品語は大体よく見かけるし覚えやすいから特に問題がないけど、今の日本人がよく、まだ定着もしていない外来語を使うので、反応で

きにくい”（協力者2；6）と、協力者全員で“教科書にある外来語は簡単な日常会話なら足りるかもしれないけど、日本人と実際に日本語で会話したら足りるわけない”というような意見があった。[参考書]では、外来語の知識をまとめている参考書があるが、“でもその語源や原語などもつけて欲しい”（協力者6；7）一方、[教師の助け]において、協力者全員で“教師が授業であまり、教科書に載っていない外来語を補充したりしない”という意見をも述べた。このように、教科書と教師の助けが足りないため、学習者は授業以外のルートで外来語の語彙を積み上げていく。例えば、“日本のバラエティー番組やアニメを見たらたくさん外来語が学べる”（協力者1；3；5；7）という回答があった。従い、教師が授業で積極的に学習者に、教科書に収録されていない新しい外来語を補充したり、日本のテレビ番組などの生の日本語素材を提供したりすることが望まれる。最後に、[本場の日本語環境]では、日本人との接触の多寡と本場の日本語で書かれた文章を読むか否かによって、それぞれさらに三つと二つの状況が出てきた。例えば、“私は日本にいますので、毎日日本人と喋っているから、相手からわからない外来語があるたびに調べて覚えるようにすると、たくさん外来語を学ぶことができた”（協力者3）と“日本人の友達とチャットしたり、日本の映画やドラマ、アニメを見たりしたら、教科書より多くの外来語を身につけた気がする”（協力者1；3；5）というような、本場の日本語環境にすることで外来語を学ぶ例があった。

#### 4.3.4 【言語要因】

【言語要因】では、[中国語知識]をはじめとする七つのサブカテゴリーがあぶり出された。まず、[中国語知識]において、中国語が表意文字であるため、外国語から入って来た語彙は意識され中国語そのものとなって受容されることが多く、このような母語特性の影響で育った中国人は音訳の

外来語への受け入れもより弱いと考えられる。例えば、アメリカの社交ウェブFacebookは日本語でいうと原語の発音とあまり変わらない「フェイスブック」となるが、中国語だと「臉書（顔と本の意）」となる。次に、[英語知識]において、英語知識が役立つが、その代わり非英語語源だと苦手であるという意見（協力者全員）があった。また、見かける[頻度]では、“高頻度表現はやさしいが、低頻度表現だと難しい”（協力者1；2；4；6；7）という意見があった。それから、[音韻類似性]は、先行研究で述べた「表記のゆれ」とは違い、“外国語から外来語となった時原語の発音と違いが生じるため、どこに長音があるか、どこに促音がつくべきかなど、そのカタカナ表記の規則が捉えにくい”（協力者1；2；3；4；6；7）という意味を指す。従い、外来語の表記規則を指導者が学習者とともに発見し、まとめたあと学習者に伝える必要があるだろうと推論できる。他に、[音韻類似性]の高低によって難易度も違ってくるという意見（協力者2；4；6）もあった。さらに、[文脈]において、“知らない外来語があったらいつも文脈から意味を推測する”（協力者6；7）という回答があった一方、“外来語の意味は具体的なものなので、容易に推測できるものではないから、文脈を頼りにしていない”（協力者8）という回答もあった。最後に、[表記習熟度]とは、カタカナ表記に対する習熟度が比較的に低いため、外来語の多い文章は読みにくいことである。例えば、“ひらがなか漢字なら、一見ですぐに意味が反応できるけど、外来語は日本語全体における割合が低く、習熟度も低いから、（読む）スピードを少し落として分析する場合が多い”（協力者1）という回答があった。これによって、外来語をより頻繁に触れさせ、習熟度をアップさせる必要があると推論できるであろう。

#### 4.3.5 【学習者要因】

【学習者要因】では、概ね [学習意欲と行動]、

[応用意識と行動] と [心理] の三つに分けられる。まず、[学習意欲と行動] には、主動的に学ぶかどうかと、自ら調べるかどうかによって、さらに四つの概念があぶり出された。特に「知らない外来語に遭遇したらどうする」という質問に対して、協力者全員で“一般的にはまず英語知識を使って当てるが、それでもわからない場合は辞書で調べる”と回答した一方、“時にはそのまま放置する”と回答した協力者もいた（協力者1；2；3；7）。次に、[応用意識と行動] には、積極的に学んだ外来語語彙を使うかどうかによって、二つの概念が出てくる。例えば、“純正の英語発音を守るため外来語の使用を回避するとの意見（協力者1；3）と、“外来語を多く使うとオシャレな気がするからよく意識して使うようにしている”（協力者4；8）最後に、[心理] には、外来語が急増することに対し、前向きに肯定する学習者と、それをよくないことと捉える学習者がいることがわかった。例えば、“急増するという事は、必要とされているということ。それ（外来語）を使うことでコミュニケーションもスムーズになれるし、いいことだと思う”（協力者4；5；6；8）という意見がある一方、“漢字語か和語など本来の言い方があるのに、外国語から新しいものを取り入れるのはよくないと思う”（協力者1；2；3）と、“論文を読むとき、「ナレッジ」という単語が出てきて、最初はどうしてもわからなかったけど、アメリカンイングリッシュの「knowledge」にあたる外来語であることを知ったら、複雑な気持ちでいたわ。「知識」でいいのに、本当に必要あるのかと、正直思った”（協力者3）という感情混じった回答もあった。

#### 4.4 質的研究のまとめと展望

今節で、8人の中国人上級日本語学習者に半構造化インタビューを行い、そこで得られた質的データを質的研究法であるM-GTAを用い分析した。その結果、三つの方面から外来語の習得に関

わる影響要因があぶり出された：【学習環境要因】、【言語要因】と【学習者要因】の三つの方面である。

学習環境要因には、[教科書]、[参考書]、[教師の指導]、[ピュアな日本語環境] と [習得のメインルート] の五つの要因があり、言語要因には、[中国語知識]、[英語知識]、[音韻類似性]、[発音と表記ルール]、[文脈]、[表記習熟度] と [頻度] の七つがあることがわかった。学習者要因には [学習意欲と行動]、[応用意識と行動] と [心理] の三つがある。これらの影響要因はお互いに独立しているのではなく、関連しながら外来語の習得に影響を及ぼしていると考えられる。

インタビューを通して、外来語習得における英語知識の重要性は十分に見られたと言える。他に、教科書提示、参考書補助と教師指導の不足が見られ、今後、これらへの対応も必要であり、期待できよう。また、外来語の習得に困難を覚える原因も先行研究を通していろんな観点が出された。が、今回インタビューを通して見られたのは、カタカナ語を難しく思うのは、それ自体が難しいのではなく、中国人学習者にとってカタカナ語彙より漢字語彙が親しみのある表記形式であるため、外来語を難しく思ってしまう傾向がある、ということである。これにとどまらず、外来語の急増を否定的に捉える心理も、多少外来語学習への抵抗も生まれると考えられる。これに関して、情意フィルター仮説が挙げられる。情意フィルター仮説とは、習得を妨げる心理的な壁のことである。Krashenの情意フィルター仮説によれば、情意フィルターの障壁がない学習者の場合は、言語入力と言語習得装置へそのまま送られ、言語出力へとつながるが、情意フィルターの障壁が大きい学習者の場合は、言語入力の一部しか言語習得装置へ送られず、従って言語出力も呼応して減少することになるとされる。国立国語研究所（1995）も、日本語教師は学習者の外来語に対する心理的抵抗間について知っておく必要があると指摘している。よって、この点に気づかせ、心理的障壁を減らすことが出

来れば、学習者の習得も促進できるであろう。

#### 参考文献リスト

1. BIGGS, J. The Revised Two-factor Study. Process Questionnaire : R-SPQ-2F[J]. *British Journal of Educational Psychology*, 2001, 71(1): 133-149.
2. JASONE CENOZ, BRITTA HUFEISEN & ULRIKE JESSNER. Cross-linguistic influence in third language acquisition: Psycholinguistic perspectives[M]. *Multilingual Matters*, 2001.
3. 国立国語研究所. 外来語に関する意識調査[R]. 国立国語研究所, 2005.
4. 国立国語研究所. 外来語に関する意識調査Ⅱ[R]. 国立国語研究所, 2004.
5. 陣内正敬. 日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育[J]. *言葉と文化*, 2008(11): 47-60.
6. Jha Bulbul, 常笑, 林韻, 王校偉, 松見法男. 中国語を母語とする上級日本語学習者の未知語の意味推測課題—単語表記と文の制約性を操作した実験的検討—[J]. *広島大学大学院教育学研究科紀要*, 2018(2-67):173-180.
7. 鄧琪. 中国人日本語学習者の外来語使用に対する一考察：多言語母語の日本語学習者横断コーパスを用いた調査を踏まえて[J]. *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 2018(3): 241-261.
8. 原田康也, 森下美和, 平松裕子. カタカナ語の英語学習に対する影響[J]. 2019年度日本認知科学会第36回大会, 2019: 503-511.
9. 望月通子. 基本語化を考慮した外来語の学習と教材開発—その振り返りと新たな開発に向けて—[J]. *外国語学部紀要*, 2012(6): 1-16.
10. 大和祐子, 玉岡賀津雄, 初相娟. 中国人日本語学習者による外来語および漢字語の処理における学習期間の影響[J]. *ことばの科学*, 2017(26): 101-120.
11. 大和祐子, 玉岡賀津雄. 中国人日本語学習者による外来語処理への英語レキシコンの影響[J]. *レキシコンフォーラム*, 2013(6): 229-267.
12. 羅濟立. カタカナ語の習得についての事例研究—LARP at SCUによる縦断的資料の分析から—[J]. *台湾日本語文学報*, 2010(27): 219-240.
13. 桂詩春. 新編心理语言学[M]. 上海外语教育出版社, 2000.
14. 譙燕. 大学基础阶段日语教材的词汇分析—以日语外来语为例[J]. *日本学研究*, 2016(00) : 231-239.